和泉地区副所長

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学情報科学センター 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4292

◇　教育の情報化に向けたサポート体制の拡充を

鈴木哲也　〔和泉地区〕

和泉には「ワンストップサービス」の理念のもとにAV・ITサポート体制が構築されている。これはリバティータワーにおけるサポート体制の不備から学び、出来る限り理想的な教育支援体制をとるべく生み出されたもののようである。この経緯については「情報科学センター年報」第13号に掲載されている阪井前副所長の所感に詳しく書かれており、当時の関係者の方々の熱気が伝わってくる。だが、現状に満足するのではなく、さらに、和泉キャンパスにおけるAV・ITサポートの体制を拡充する必要が出てきたように思う。和泉キャンパスの状況が大きく変化することが必至だからだ。

最も大きな変化は、情報コミュニケーション学部の一・二年生、およびフレックス化の後に、現行二部に相当する夜間主コースの一・二年生が和泉キャンパスで教育を受けることがほぼ決定したことである。まず、この量の変化に対応して、コンピュータをはじめとしたマルチ・メディア教育の環境を拡充・整備しなければならない。

さらに、コンピュータ等の情報機器を使用した授業が、今後みせるであろう、質的な変化にも対応しなければならない。高等学校で情報科目を履修済みの学生が、いずれ、入学してくることを考えると、和泉において従来のようにコンピュータの基礎的技術を習得させることは必要なくなるかもしれない。現状でも、経営学部の試みに見られるように、学生がコンピュータを使用できることを前提とした授業がふえつつあり、今後、そうした傾向は一段と強まってゆくものと思われる。その場合、コンピュータを使用した授業が、学部ごとに、あるいは担当教員の意図に従って多様化・個別化してゆくだろうということが、当然、予想される。

そうなれば、和泉における現在のAV・ITサポート体制で十分な教育支援を行うことは、ほぼ不可能だろう。おそらく今後二年間ほど、和泉のスタッフはこの変化への対応に追われるだろう。前副所長は、どんな立派なサポート体制を築いても「サポートだけで閉じているようでは、教育に生かすことは出来ない」と仰っているが、確かにその通りだと思う。教育現場における、多様なニーズに応えるためには、いわゆるサポートデスクのスタッフが孤立していては意味がない。現場にたつ教学側スタッフ、サポートスタッフ、関連事務部署それらを円滑に結びつける協力体制を築き上げることが重要になるだろう。2004年をにらみ、和泉新教育棟の建設計画が立てられつつある。そこに、新しい時代の教育支援システムを具体化することが出来ないものだろうかと考えている。